

二つの力



北九州市立大学文学部4年

わたなべ しんご

渡辺 伸悟さん

1 はじめに

日本は壁だらけの社会だった。閉鎖的・固定的と言いつてもいい。200年以上続いた鎖国はその最たる例だし、衆人監視のムラ社会、持株会社や終身雇用、年功序列、さらには財閥…。ありとあらゆるレベルにおいて日本は壁だらけだった。長い年月をかけて、それは私たちの国民性へと定着していった。やがてそれは、アメリカとヨーロッパに破壊された。国家はベリーに、経済はマッカーサーに。

ここ10年くらいで、ITは劇的な進化を遂げた。洪水のような膨大な情報とボーダレス化していく社会は、人々に「個」をもたらし、コミュニティという「個」の集合体の性質を変え、社会を細かな破片へと変えていった。しかし、ITの本質は、「集合・集積」にある。単体では微小な力を集め社会変革の大きなうねりへと変えていくことにある。その激動期である現在、私たちはITをどう受け止め、どう考えるべきなのだろうか。

2 ITは何を引き起こしたのか

ご存じのようにインターネットの歴史は浅い。マイクロソフトの創立は1985年で、現在注目的であるグーグルの設立は1997年だ。歴史にしておよそ20年。産業革命がその変革の力を発揮するまでに100年以上かかっていることを考えると、このインターネットがもたらす変化がこれから大きくなることは、想像に難くない。では、IT革命はこの社会に何をもたらしたのだろうか。

まず、国境を破壊し、ビジネスを変えた。金銭や情報が軽く国境を飛び越え、金融や貿易、流通の世界に劇的な変化をもたらした。そして、人々はその情報を自宅

にしながら簡単に手に入れることが出来るようになり、クチコミなど大衆のビジネスへの影響力が増大した。近年では、かつての高度経済成長期に破壊されたコミュニティがITという道具を手に入れて、性質を変えて復活している。

かつてのコミュニティは、地縁や血縁など「地域」「土地」「家族」などを基盤とした集合体であった。そこには多種多様な人々が住んでいて、バラエティに富んだ生活形態があった。対照的に、近年のコミュニティは、目的合致的な性質を強く帯びている。ITインフラとそれを活用するソフトやビジネスの興隆によって、それまでは埋もれていた「個人」そのものが社会の中に浮かび上がってきた。つまり、私たち一人ひとりの欲求を社会につながる仕組みが出来上がったのである。しかし、残念ながら私たちは強大な社会に対して「個人」で対峙できるほど強くはない。そこで、平たく言えば同じ「趣味」「嗜好」を共有する集合体がインターネットの仮想空間に、まるで海に浮かぶ孤島のようにポツポツと生まれ始めたのである。それまで影を潜め、社会の表舞台に立つことのなかったマイノリティも、表現する場所、仲間が生まれたのだ。

「個」が力を持ち、価値を創造していく社会をITの普及はもたらした。しかしその「個」は自立しているわけではなく、あくまで目的合致的集団の中においてのみ力を発揮する「個」でしかない。

3 ITの本質

このように考えてくると、ITの本質は次のように要約することが出来るのではないだろうか。一つは、既存の社会の中に埋もれてきた「個」のエンパワメント。もう一つ

は、多様化する「個」に対応するプラットフォーム(孤島)の構築だ。

羽生善治はインターネットがもたらした現象を「情報の高速道路が出来上がって、その最先端で皆が渋滞している」(『ウェブ進化論』、2006)と表した。昨今、人々は、ある一定のレベルまでは簡単にたどり着くことが出来るようになった。しかし、そこから上に行くには自ら苦しむしかない、という意味であるが、これはITの本質を鋭く突いている。私は、「はじめに」で、ITの本質は「集合・集積」であると書いたが、そのようなインプットだけでは社会は成り立たない。それは、インプットにはそれ相応のアウトプットが求められるものだからだ。人々は、自分自身の興味や嗜好性によって情報を取捨選択し、それに精通していく。リナックスのオープンソースコードや、ウィキペディア(Wikipedia)・プロジェクト、ブログなど表現の手段、場所には事欠かない。言うなれば、「モノ言わぬ人々」だった小さな「個」の声が、ITを通じて世界中に届き、共有され、相乗効果を発揮するという現象が起き始めているのだ。自らの「知」を目的合致的集合体の中で集積し発揮していく。そうして、「個」はエンパワメントされていく。

一方で、グーグルやアマゾンなどバーチャルな空間を本拠地として活動している企業は、このような「個」の集積が大きな力になることを早くから見抜き、これまでとは全く異なる新しいビジネスを構築した。アフィリエイト広告やロングテールなどはその最たる例であろう。彼らは主に、プラットフォームを構築していると言える。「個」は、そのものでは非常に弱い。日々刻々と変化し、増殖していくバーチャル空間においては一瞬でその膨大な情報の渦に飲み込まれて消えていってしまう。しかし、そこに港があればどうだろうか。インターネットという大海原を漂う「個」たちは、特定の目的にしたがって港に引き寄せられそこで、自らの知を集積していく。共通の目的を持つ仲間と出会い、緊密な関係を作り上げていく。梅田(2006)は、「10万人から1000円ずつもらうのではなく、1億人から1円ずつもらう発想」と、ITにおける変化

を評する。膨大な「個」とそれが寄り付くプラットフォームを作り上げたからこそ生まれてくる全く新しい発想だ。

4 未来への課題

ここまで、近代のITが私たちの社会にもたらした変化について概観してきた。しかし、それがもたらした課題・問題もまた多い。

ITインフラ、つまり、インターネットそれ自体は単なる道具に過ぎない。既存の価値観(=壁)を破壊し、インターネットの向こう側、バーチャルな世界に新しいコミュニティを作り出したといっても、私たちはこのリアル(現実)社会に生きているわけで、バーチャルな世界に入り浸ることは不可能だといえる。例えば日本では、アフィリエイトだけで生活するのは難しい。デイトレーダーのような人々は、ネットを利用して生計を立てている代わりに自宅から外に出ないことが多いということもある。今後、私たちが考えていく必要があるのは、ITによって集積された「知」をいかに、現実世界へアウトプットしていくかということである。現実世界で起こる様々な課題・変化(経済格差、貧困の増大、人口問題、団塊世代の引退)に対して、かつての分業的に分散・専門化した孤島の「知」を組み合わせて、全く新しい「知」を作り出さなければならぬ。そのためには、孤島の住人達は、グーグルやアマゾンなどプラットフォーム提供者に頼るのではなく、自らが他の島へと、橋を架けていかなければならぬ。

閉鎖的社會を構築しやすい日本の国民性において、この点は非常に重要である。他人に無関心な人々、マナーやモラルがない人々が増えてきていることは、言い換えれば、自分が所属するコミュニティ以外は「存在しない」ということだ。それでは、せっかく専門化した知識を組み合わせる場所がない。現在、ウィキペディア(Wikipedia)やグーグル、リナックスなどは「知の集積と組み合わせ」に関する事業を行っているが、組織体としてではなく人々の意識の変革(イノベーション)が起こら

なければ本当の意味での変化は当分先のことになりかねない。

5 まとめ—— 今後の私たちに求められるもの

ユビキタス社会においては、一人ひとりの力の底上げが社会の決定要因となる。10センチの円筒の一部分が5センチだったら、どんなにがんばっても水は5センチまでしか溜まらない。私たち一人ひとりが意識して「個」として「自立」をする必要がある。それでは、自立に必要な要素とは一体何だろうか。

私は、非連続的な想像力と連続的な具体化力だと考える。

非連続的な想像力とは、有り体な表現を使えば「突拍子もない考え」ということだ。通常では結びつくはずのない幾つかの事象を結びつけること。そのためには、孤島に留まっていたはいけない。興味の対象を全てに広げ、自身の専門性と向学心を武器に未開の孤島へと踏み出していく勇気が必要だということだ。

もう一つ、連続的な具体化力とは、想像を現実結びつけ、現実に影響力を行使することだ。生み出されたアイデアを、いかに現実社会に沿うように構築していくか。そのためには、人脈、コミュニケーション力、説得力、課題発見力などが重要になってくる。

ところで、私たちの世代(20代前半)以下の年齢層は、ITリテラシーに関しては非常に高い。世界一のITインフラを誇る日本において、携帯を使いこなし、当たり前のように電子通貨で取引を行い、パソコンは一人に一台以上ある。しかしながら、上記したような二つの要素に関しては残念ながら高いとは言えない。一つには、ITリテラシーの高さ故という理由がある。あまりに日常的であるがために、その価値やリアルとバーチャルの境界線についての意識を持ちにくいのではないかということだ。また、画一的な教育環境も、想像力や具体化力を養う

土壌を奪っているとも言える。

「個」として、目的合致的な集合体に所属することは、閉鎖性の弊害を生む。非連続的な想像力と連続的な具体化力をもって橋を渡し、集積された「知」を社会への貢献のために役立てようとする姿勢を持つことこそ、これからの私たちに求められることであり、また「自立した個人」へ近づく裁量の道だと私は信じている。そして、そのような「自立した個人」が生み出す「知」と「実践」こそが、ITの効果を最大限に発揮し、社会をよりよい方向へ導く原動力になるのではないだろうか。

参考文献

- 1)『歴史の哲学』ピーター・F・ドラッカー 2003
- 2)『ウェブ進化論』梅田望夫 2006